特定非営利活動法人
宮入慶之助記念館

宮入慶之助記念館だより 第25号

特定非営利活動法人宮入慶之助記念館
2017（平成29）年　12月11日発行

巻頭言　宮入先生と明治のある医学生

名誉館長　多田　功

宮入慶之助が勤めた京都帝国大学福岡医科大学（のちの九州帝国大学医学部）は明治36年（1903）に設立された。その第2回卒業生の中に岩手県生まれで第一高等学校を卒業して医科大学に入学し、恩賜の銀時計を受けて卒業した小野寺直助という人がいる。その孫にあたる龍太氏が「日露戦争時代のある医学徒の日記」（弦書房）を書いている。この中に宮入教授と直助の間に下記のような親しい師弟関係が記録されていて興味深い。

建学間もない大学とあって、教授たちと学生はよく一緒に旅行をしたり、ビールを飲んだり、浪曲を聴きに行ったりしている。直助の同期生に後に宮入教授の跡を継いで教授となった大平が居て仲良く同じ下宿にいたこともあった。将来、欧米留学を目指し直助は大平ら学生数人と宮入教授にドイツ文学「エミリア・ガロッテイ」の輪読会を指導してもらった。レフラー教授の研究室で研究した宮入先生はドイツ語に極めて堪能であった。尤も当時の教授は殆どドイツ留学組で、講義にはドイツ語が頻発していた。教科書もドイツ語だった。ある時、直助は宮入先生に「日本人は海外の知識を紹介するだけで研究能力が低いと言われている。君なども本を読むだけでなく、研究をして論文を発表したまえ」と励まされ、向学心を刺激された。

大学卒業当時の直助
（明治41年）
右の図書から

宮入先生は内科の稲田、耳鼻科の久保、外科の三宅教授などと共に名調子の講義で、学生はノートを取るのも忘れて聞き惚れたという。宮入先生は自らをクツワムシと自称する程のおしゃべりだったらしい。学生にはノートを取るなと命じ、最後にまとめの数行を板書された。

時は日露戦争の頃で、明治38年1月には旅順陥落、3月には奉天大会戦と海の向こうで同世代の若者たちが戦っていた。祝勝提灯行列に参加しながらも、医学生たちの思いは複雑だった。講和条約が成ってみると、賠償金がとれないということで国民は政府を各地で強く非難した。直助も勉強をする傍らこれを「空前の屈辱」と日記に記している。

直助は3年生の時に生理学の石原教授のもとで「魚類の血球を比較分類する」という自主研究を開始する。しかしどうしても血球染色が上手くいかず、宮入先生に教えを乞うた。この研究は論文として発表され、東京でも好評を博し、研究者としての最初の仕事になった。

こうして直助は首席で卒業し脚気の研究などに従事し、欧州に留学した。帰国後、大正5年に少壮33歳で九州大学の第三内科学教授となった。小野寺式診断法が有名である。国産のX線撮影装置第1号機が出来たのが明治42年（1909）という時代のこと。宮入先生に育てられた多くの医人の一人である。

『日露戦争時代のある医学徒の日記』

慶之助生涯探索① 小学・中学就学事情

山口　明

明治５年８月３日、明治政府は欧米の教育制度に学び「邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめんことを期す」として学制が発布されます。欧米の近代思想に基づく個人主義、実学的考え方を根底にして学校に就学すべきこととした新しい学校設立の意義を説いたものでした。

これを受けて慶之助の生まれた更級郡西寺尾村では杵淵村と東福寺村中沢組とで典厩寺を仮校舎として稽徴（けいちょう）学校が明治６年12月に設立されます。この稽徴学校は千曲川の西側にあったため、川東の児童には通学が困難であったため、翌年４月に西法寺を借りて西寺尾学校が設立されます。この時の生徒数は男子74名、女子41名の115名でした。

慶之助の父敬長は明治維新後には禄を失ったため、自宅で寺子屋を開いて生活の糧を得ていました。慶之助はそうした環境の中で学問への興味関心を増していったようです。慶之助が８歳の時にできた稽徴学校には川を越えてでも勉学に通ったことが推測されます。何分にもこのころの慶之助関係の資料が全くないため、資料的な裏付けができないところです。翌年４月には西寺尾学校ができると当然ながら自宅から近くのこの学校に転校したことと思われます。

小学校は学齢で13歳までを対象としたことから、この後慶之助は上田変則中学校（現上田高校の前身）に行くことになります。上田変則中学校に関する当時の学籍簿とか生徒数などに関わる資料は全く無く、これも資料的に裏付けるものはありませんが、上田に行ったという宮入家での言い伝えだけが論拠です。

上田変則中学校は明治11年６月５日に上田町字鍛冶町月窓寺衆寮に開校します。当時の筑摩県（信濃分が明治９年８月に長野県に統合）では松本変則中学校（第十七番中学変則学校）が明治９年７月に開校しています。上田変則中学校はこれに次いでの開校となります。慶之助は開校した翌年の明治12年に入学したと思われます。

松本変則中学校には、松代町から横田秀雄（後の大審院長、慶之助より３歳年上）が開校とともに入学しています。

長野県制定の「変則中学規則」中の「校則」は、「小学全科卒業ノモノヲ入学セシムルモノトス」とあり、「生徒ハ年齢満十四年以上十八年以下」としています。また「生徒ハ都テ入舎セシムルモノ」と寮生活が原則となっています。「入学ハ毎年一月七月第二土曜日」と定めています。月謝は「当中学区内ノ者上等十弐銭五厘・下等六銭二厘五毛、他ノ管下及ビ他ノ中学区ノ者上等二拾五銭・下等弐拾銭」と定めています。

また「教則」には「教科ヲ分チテ八級トシ、一級六ケ月在学合セテ四年トス」とあります。８級から５級までの下等で２年、４級から１級までの上等で２年、合わせて４年ということになります。

変則中学とは学制に「当今中学ノ書器未タ備ラス此際在来ノ書ニヨリテ之ヲ教ルモノ或ハ学業ノ順序ヲ踏マスシテ洋語ヲ教ヘ又ハ医術ヲ教ルモノ通シテ変則中学ト称スヘシ」(第三十章)と規定しています。いわば経費、教員組織、教材等々での特別扱いでの過渡的な中学校といえるものです。

松代藩士佐久間象山は若いころ、上田の「活文禅師」が開いていた寺子屋「多聞庵」に六里（約24ｋｍ）の道を馬で通い和漢蘭などの学問を学んでいます。活文禅師は松代藩士の二男の生まれです。慶之助の父敬長は佐久間象山とも交流があったということで、象山が上田で学んだことなども聞いていたかもしれません。慶之助が上田変則中学校に進学したのも象山が学んだ地ということがあったのかもしれません。

慶之助は少年の頃、甲府盆地を中心に奇妙な風土病が流行しているのを聞き、原因を究明したいという医学への思いが芽生えたといいます。

上田町は横浜港の開港以来、養蚕・製糸業・蚕種業の中心地として発展し、蚕種・生糸の輸出に関わる横浜への直接販売ルートの確立、横浜の居留地での「上田町」の区画設置など明治20年ころまでは「信州の横浜」ともいわれていました。

上田町では幕末から明治初期の蚕糸業の発展にともなって、明治10年11月８日には第十九国立銀行の開業、翌年５月１日には県内最初の上田電信分局の業務開始、多くの私立銀行の開業などがありました。こうした社会的及び経済的趨勢の中に上田

変則中学校が創設される必然性があったのではないかと考えられます。

慶之助は1年余りを上田変則中学校で勉学し、このあと父敬長の許しを得て、明治13年春に上京することとなります。

これまで慶之助の上京するまでのことが資料がなく不明となっていましたが、就学制度導入（学制発布）と学齢、小学校の創設、宮入家の言い伝えなどを考慮して跡付けてみました。

◆明治初期の西寺尾村ほかの小学校就学事情（慶之助が小学生だったころ）

村名	学校名	仮開校	明治6年度			明治7年度			明治8年度				
			教員	生徒		教員	生徒		教員	学齢		生徒	
			男	男	女	男	男	女	男	男	女	男	女
東福寺村	東福	明治6年12月	1	64	68	4	53	21	2	62	77	62	46
杵淵村	稽徴	明治6年12月	3	134	129	2	48	9	2	55	44	54	12
西寺尾村	西寺尾	明治7年 4月		64	13	3	74	41	3	85	76	75	31

村名	学校名	明治9年度				明治10年度				明治11年度		明治12年度	
		教員	学齢	生徒		教員	学齢	生徒		学齢	就学	学齢	就学
		男		男	女	男		男	女				
東福寺村	東福	4	189	92	53	5	189	71	39	272	153	249	145
杵淵村	稽徴	5	127	55	28	6	128	57	8	118	63	122	46
西寺尾村	西寺尾	3	130	59	29	5	133	47	19	127	60	125	63

※明治6年西寺尾・杵淵両村と東福寺中沢組が稽徴学校を設立。

※明治9年7月東福寺村中沢組は稽徴学校から東福学校へ移る。

※西寺尾村明治6年度の生徒数は就学人数を示す。

※データは『長野県教育史』（別巻1・1975）を再構成した。

記念館の資料整理が始まる！

山口　明

平成29年度通常総会が終了した6月末から今年度事業計画にある収集資料の整理・保存事業に着手しました。

西寺尾地元会員により収蔵資料の全体像を実見して整理の方針・方法等を検討し、以下の収蔵資料の整理方針を立てました。

①資料を全てデータ化する。

②資料に番号を付けて管理する。

③資料を分類して資料の性格付けをする。

④資料の受入区分を明確化する。

⑤個別資料を慶之助生涯に位置づける。

⑥資料の写真撮影を行い、データ化する。

⑦慶之助の著作文献を整理する。

⑧図書資料をデータ化する。

⑨収蔵資料目録を作成する。

6月末から12月までに記念館にて12回にわたる整理作業を行いました。

①と②を実施するために資料に番号付けを行い、番号順に収蔵資料台帳に資料名・数量などを記入。③の資料分類では典籍（10）・論文（20）・写真（30）・書簡（40）・文書（50）・標本（60）・絵図（70）・書画（80）・講義資料（90）・医学関係品（100）・衣服（110）・印章等（120）・装着品（130）・時代資料品（140）・新聞記事等（150）その他（160）と大分類し、また各項目毎に細分類しています。

④では所蔵（A）・寄贈（B）・借用（C）・寄託（D）・購入（E）・採集（F）・制作（G）と区分。⑤と⑥では個別資料ごとに収蔵資料カードを作成、写真を添付してデータ化を図ります。⑦はこれまでに収集した著作に加えて、さらに調査を行ってリスト作成をし、文献の収集と文献を個別に封筒に入れて整理。⑧はこれまでに収集した関連図書に番号付けをして図書台帳に記入して整理。

これらの作業と同時に⑤を実施するため、これまでにも年譜は作成していますが、更に検証を重ねて慶之助のさらに詳細な生涯年譜を作成することとします。この生涯年譜を軸として個々の資料を位置づける作業を行うこととします。

今回の整理作業の中で慶之助の東京大学医学部予科時の授業料領収証や大学院時代のこと、ドイツ留学時にベルリンで撮影した写真の存在、320件ほど確認した著作が現役時より九大退官後の方が多いなど興味深い知見が出てきています。

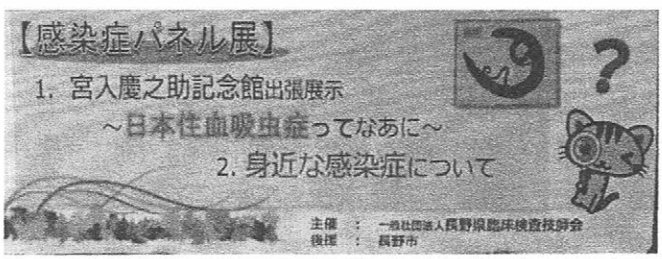
次にこうした整理作業を踏まえて総合的な展示構成を再構築し、多くの来館者に見てもらえるような体系的な展示を目指し、それに合わせた『日本住血吸虫症中間宿主貝を発見した宮入慶之助』（仮称）の展示図録を作成発行したいと考えています。

まだ始まったばかりで多大な時間を要すると思いますが、こうした夢を見ながら作業をしています。

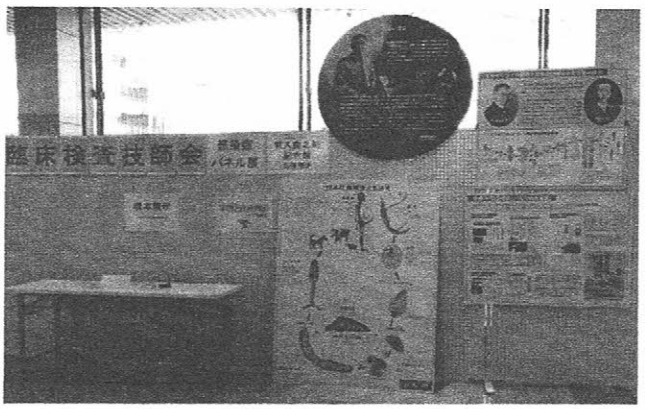
日本住血吸虫症のミニ展示開催！

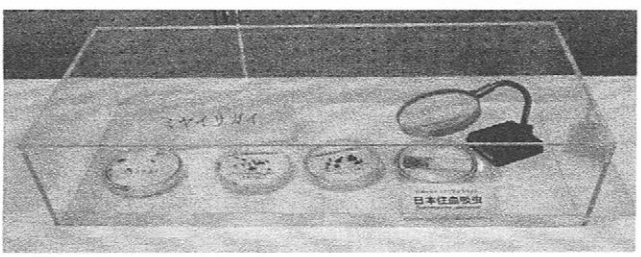
長野県臨床検査技師会が「感染症を知る～今日からできる予防と対策」を11月19日（日）に長野駅ビルMIDORI長野3階「りんごのひろば」で開催しました。臨床検査技師や長野市保健所職員がワクチンやHIVウイルスなど感染症に関するミニ講座や感染症検査診断薬を展示し、感染症について紹介する市民向けのイベントでした。

この中で日本住血吸虫症の中間宿主貝を発見した地元の宮入慶之助のことについて展示の一環として是非紹介したいという依頼があり、当館もいい機会としてミヤイリガイ、日本住血吸虫症の幼虫標本、展示パネルを貸し出し、イベントに協力しました。



好天の日曜日とあって多くの方々にみていただき、宮入慶之助のこと、記念館のことを知っていただく機会になったようです。





編集後記

□記念館だよりは宮入源太郎館長がこれまで編集をされてきましたが、体調が悪く入院の事態となり、今年度新規会員になったばかりの山口が編集を担当することとなりました。

□本文の中にも記しましたが、資料の保存と整理を今年度の事業の中核として取り組んでおります。これは宮入館長が「慶之助関係資料をしっかりと形にして次代に継承していかなければならない。」との従前からの強い思いによるものです。宮入慶之助という人物と業績を歴史の中にしっかりと位置づけをし、顕彰していくことは私たちの身近な歴史に関わることでもあり、大事なことと考えます。慶之助関係資料を調査整理することを通してこれまで以上の情報発信をしていきたいと思っています。

宮入慶之助記念館だより　　第25号
発行者
特定非営利活動法人 宮入慶之助記念館
編集者　　宮入源太郎
〒388-8018 長野市篠ノ井西寺尾2322
Tel&Fax（事務局）026（293）3828
（記念館）026（293）4028
ホームページ http://miyairikinenkan.com/
発行日　2017（平成29）年12月11日